



52-1 Yada, Suruga-ku Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan
inside NEWS



CONTENTS

創立20周年記念式典	1	教員の人事等	16
創立20周年記念事業・市民講演会	8	夏期語学研修	17
創立20周年記念事業・公開セミナー	8	インターシップ	19
国際交流	9	経営情報学部オープンセミナー	20
第7回日中健康科学シンポジウム	11	図書館だより	21
第11回静岡健康・長寿学術フォーラム	11	はばたき寄金からのお知らせ	22
サテライトシンポジウム	11	学生スピーチコンテスト・最優秀賞	23
しずおか新産業技術フェア2006	12	第20回創祭	25
知的財産セミナー	12	連合学友会「はばたきの会」設立	27
しずおか環境・森林フェア	13	クラブ・サークル紹介	28
環境研究交流しずおか集会	13	はばたき100号までのあゆみ	29
著書紹介	14	谷田風土記	31
受賞	15	大学院連携講義	31
研究助成採択	16		

静岡県立大学創立20周年記念式典を開催



静岡県立大学は、昭和62年に静岡薬科大学、静岡女子大学、静岡女子短期大学の県立3大学を統合し、21世紀を展望した新しい総合大学として開学以来、本年で創立20周年という記念すべき年を迎えました。去る11月7日には、ホテルセンチュリー静岡5階「センチュリールーム」において、本学の創立20周年記念式典が開催されました。

式典は、石川嘉延静岡県知事、芦川清司静岡県議会議長、国際交流協定締結校である国立フィリピン大学のセルヒオ・カオ学長をはじめとする海外の7大学の学長等、県内の各大学長、県立大学参与、名誉教授、後援会、同窓会、関係企業、関係団体及び本学教職員等約400人が出席し、総合司会である本学国際関係学部・吉村紀子教授の進行の下、挙行され、本学の20周年の節目を祝いました。



第1部の冒頭、設置者の静岡県を代表して石川嘉延知事が挨拶を行い、続いて、本学を代表して西垣克学長が式辞を述べました。これらのセレモニーに引き続いて、財団法人日本学術振興財団会長で元文部大臣の有馬朗人氏による特別講演が行われました。講演テーマは、「日本の大学の現状と将来」で、海外の大学間交流協定締結校の招待者の方々も臨席されたことから、パワーポイントの日本語版と英語版を駆使し、同時通訳により行われました。同氏は講演の中で、大学生の学力低下に触れ、統計資料を示しながら「学力低下は18歳人口の減少と大学の定員増に加え、入試科目の減少も原因」と解説されるなど、大学の置かれた立場とその将来について、ユーモアを交えながら詳細に分析され、とても意義深い講演になりました。

第2部では、「21世紀に、いかに大学はあるべきか」をテーマに、パネリストに海外の大学間交流協定締結校7大学の学長等をお迎えして、ラウンド・テーブルディスカッションが、西垣学長の司会で行われました。各国の大学の現状と課題を紹介しあうとともに、今後の大学のあるべき姿について意見交換がなされました。



夕刻からは、会場を4階に移して、レセプションが賑やかに開催されました。司会は、国際関係学部の澤崎宏一講師と近藤隆子助手が務めました。来賓の挨拶、乾杯の後、華やかな雰囲気の中で、環境科学研究所の塩澤竜志助手と箏曲部学生による生演奏も行われました。出席者の方々は、旧交を温め、20年の間の出来事に思いをはせたり、新たな出会いを見出すなど互いに親交を深めていました。

静岡県立大学創立20周年記念式典

知事挨拶

静岡県知事 石川 嘉延

本日ここに、創立20周年を、多くの関係の皆様と一緒に祝うことができますことは、誠に喜ばしいことでございます。

静岡県立大学は、昭和62年、21世紀を展望した新しい総合大学として、多様な時代の要請に応えるため、それまでありました静岡薬科大学、静岡女子大学、静岡女子短期大学の3つの県立大学を統合して、スタートしました。

その後、9年前の平成9年に、看護学部さらに環境科学研究所、また、医療福祉系の短期大学部を開設しまして、自然科学や人文・社会科学の幅広い領域にわたって教育・研究活動を展開することになりました。平成14年度には、県立大学が提出した「食と薬」を融合した「先導的健康長寿学術研究推進拠点」が、文部科学省が推進します21世紀COEプログラムに採択されました。これらに見られるように、大学が大きく発展してきました。

地域の学術拠点として、社会の要望に応え得る有為な人材の育成や教育・研究で得られた成果の地域への還元を通じ、県民の生活・福祉の向上を図ってきた訳でありまして、この点については、多くの方々から高い評価を得るまでに至りました。これも県内の各界の皆様のお協力のもと、歴代の学長をはじめ、教職員の御努力の賜物であると心から敬意を表しますとともに、厚くお礼を申し上げます。

今日、我が国は、急速に少子高齢化が進行し、社会の活力の低下が懸念されております。また一方で、経済のグローバル化に伴う国際競争の激化への対応であるとか多文化共生社会の実現、地球的規模での環境問題、資源・エネルギーの制約への克服などの大きな課題にも直面しております。

静岡県では、「富国有徳 創知協働」を県政の基本理念といたしております。これは、本県が美しく雄大な富士山のように、物心ともに真に豊かな地域であると同時に、豊かさを有意義に活かす有徳の志を兼ね備えた魅力ある地域であることを目指しており、そのために知的価値を重視した知の創造と様々な分野の人たちが力を合わせて活動する「創知協働」の考え方を取り入れています。

この県立大学は、本県の目指す地域づくりに不可欠な存在であります。優れた高等教育機関として、学術・文化の振興のみならず、産業・経済から福祉・健康に至るまで、幅広い分野での貢献に大きな期待が寄せられております。



このような期待に応えるために、現在、県立大学においては、来年の公立大学法人化を控え、西垣学長のもとで大学改革に取り組んでいただいております。この20周年を契機に、これまで以上に県民の期待に応えられるよう、教育・研究の一層の充実にも努められるようお願いする次第です。お願いする以上、県としても責務を全うすることにやぶさかではありません。

結びに、静岡県立大学のますますの発展と、御出席の皆様のお健勝と御活躍を心から祈念いたしまして、挨拶いたします。誠にありがとうございました。おめでとうございます。

静岡県立大学創立20周年記念式典 学 長 式 辞

静岡県立大学 学長 西垣 克

静岡県立大学20周年記念式典にあたり、県立大学を構成しているすべての皆様方を代表し、学長として一言御挨拶申し上げます。

20年前に、静岡薬科大学、静岡女子大学、静岡女子短期大学の三校を統合し、新たに静岡県立大学として発足し、本日ここに20周年の記念式典を執り行うことができますことは、無上の喜びとするところであります。

20年という歳月は短いようで長いもので、「星霜移り人は去く」の言葉通りに本日はなんとしても御臨席いただきたかった、初代学長として県立大学の礎をお創りになされた内菌先生が、この10月に御高齢ゆえにお亡くなりになりました。心から御冥福をお祈りするとともに、これからも天上から県立大学の行く末をお守りいただきたいと念じております。二代学長の星先生並びに三代学長の廣部先生は、お元気に御臨席いただけただことは大変嬉しいことでもあります。県立大学が、この日を迎えられたのは本当に数多くの皆様方から寄せられた努力の賜物であると思います。

特に、本日御多用な中御臨席を頂きました本大学の設置者であられる石川県知事、芦川県議会議長には心からの御礼を申し上げます。さらに、静岡大学ネットワークとして連携を深めている、静岡大学長をはじめとする県内大学長の皆様にも御臨席を頂いたことに厚く御礼申し上げます。また、県立大学がこれからの新たな国際交流活動を推進していく拠点大学である、国立フィリピン大学長をはじめとする海外の7大学長に御出席いただき、この式典が挙行されることは、県立大学が次の10年に向かって、確実な一步を踏み出すことを確信されるものと考えています。

大学という高等教育機関は、中世ヨーロッパにおいて新たな教育制度として確立をしたとされていますが、その長い歴史の中で幾多の存続の危機を克服し今日まで発展を遂げてきました。しかし、新たな世紀である21世紀を迎え、全世界的に大学のあり方が問われ、大きな岐路に立たされています。大学教育上の最も重要で深刻な課題にそれぞれの国の大学が直面してきています。

アメリカにおいては、3,000におよぶ全大学の協会があるべき姿を提示し、高等教育におけるリベラルアーツの重要性を提言しております。ヨーロッパでは、1999年にイタリアの大学発祥の地とされるボローニャに、EU29カ国の教育大臣が参集し、ボローニャ宣言が採択され、EU全体で大学改革に臨んでいます。

わが国においても、平成15年からの国立大学法人化という大きな改革が進展し、個々の大学でさまざまな試みがなされてきています。公立大学として、静岡県立大学も来年、平成19年4月には、独立行政法人へとその設置形態を大きく変えることとなります。この契機に、県立大学は従来以上に静岡県にとって存在価値のある大学を目指し、さらなる大学改革の進展と将来的な発展を目指して、鋭意取り組んでいるところであります。

この大きな社会潮流の中で、県立大学が20周年という節目を迎えたのはひとつ歴史的な偶然かもしれませんが



が、この機に大いに大学の在り様を検討するのも意義深いことであると考えております。大学を貴族文化や大衆文化とは異質の大学文化という視点から、大学を文化形態の社会学として分析したフランスのジャック・フェルジェは、フランス教育大学の准教授時代に著した書物「中世の大学」の中で、「大学はカテドラルや議会と同じように中世ヨーロッパ文明の最も独創的な産物である。確かに、古代アテネやアレクサンドリアには偉大な教師はいたが、永続的な学問基幹としての大学は存在しなかった。」と述べています。中世のキリスト教的秩序を担う人材育成や社会経済体制の発展並びに新しい統治形態の創出に伴う人材養成、人々が国を超えて往来できる環境が整備されてきたことなど、大学が形成されてきた要因と考えられています。

このような社会状況は、科学の世紀といわれた20世紀の状況とも重ね合わさる現象とも考えられます。自由都市の発展により自然発生的に創出されたとされるパリ大学やボローニャ大学と、ローマ法王並びにヨーロッパ各地の王侯により設立された大学と、今日と極めて類似した設置形態の大学が林立したのが中世のヨーロッパであります。設立はしたが開学されなかった大学や学生が集まらず閉鎖消滅した大学など、歴史をつむぐ難しさが伝わってまいります。

20世紀は科学と技術の世紀といわれ、飛躍的な学術成果は人類に幸福と環境破壊や大量殺人兵器などの不幸の両面をもたらしています。近年神経工学の目覚ましい発展から、機械と人間の融合体も可能とされています。人工知能の前で人類の英知は影が薄くなってきているのです。21世紀は人々の心と精神文化の時代と予測されています。改めて人間とは、人類はどこに向かっていくのか、知的創造組織としての大学の存在価値が問われてきています。

スペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットは「大学の使命」の中で、大学改革の根本は、大学の使命を十分明確にすることにある」と論述しています。さらに、「大学の第一使命は平均人を、なによりもまず、教養ある人間にすること」とし、ここでいう教養とは、文化（クルトウラ）と表現しているのです。このオルテガの指摘は、現在の大学においても十分考慮されなければならないことと思えるのです。

今日の大学を取り巻く環境は、少子化による入学学生の激減、定員割れ、予算の削減などあまり明るい話題が少ない状況下に置かれています。このような状況をボストンコンサルティング、ヘンダーソン記念講座教授の、チャン・キムはレッド・オーシャンと呼んで



います。静岡県は前に雄大な太平洋が広がっています。この海をキム教授はブルー・オーシャンと言い未開拓の市場、つまり新たなるバリューイノベーションとしています。

静岡県立大学は次の20年を目指して、建学の志を高く掲げ、この未知なる可能性を秘めたブルー・オーシャンに向かって大なる船出を行いたいと考えています。本日御列席の皆様方をはじめ、広く県民の皆様方から誇りを感じていただけるような大学に日々後生が団結して作り上げていくことを、ここに固くお約束すると同時に、これからも従来以上の御理解や御厚情をお願い致しまして式辞とさせていただきます。

静岡県立大学創立20周年記念式典 特別講演（要旨）

「日本の大学の現状と将来」

財団法人日本学術振興財団会長 有馬 朗人

1 世界的大学拡大の流れ

1955年の日本の4年制大学への進学率は7.9%に過ぎませんでしたが、今日では45%で、実に進学率は5.8倍、入学者数にして4.6倍に増大しています。高等教育の大衆化は必然的に大学の多様化を要求します。

アメリカ、ヨーロッパ等々の先進諸国でも全く同じように大学の多様化が起っていることが分かります。どの国でも大学生が増加したこと、同世代の中では1/3～1/2の若者が大学生であることが分かります。従って、これらの国々でも異口同音に大学の改革が行われてきています。

現在のように大衆化した時代の大学は、社会の動きを直接に受けざるを得ませんし、積極的に社会の要請に応える努力をしなければなりません。



2 日本の大学の緊急な問題

1992年迄は第2次ベビー・ブームの影響で18歳人口は増加し続け、205万人に達しました。文部省は各大学に入学者定員を臨時に増すよう指導しました。国公立すべての大学で臨時定員増が行われました。しかしその後、学力低下論が大学から起りましたが、その原因は大学生が多くなったことにあると思います。大学生の学力低下論は過去に度々起りましたが、その度大学生の数が急増しています。もう一つ大学入試科目数を減らしたことの効果です。入試科目からはずせばその科目を勉強して来ない学生が増すことは明らかです。

現在大騒ぎになっている高等学校で必須科目として教えるべきことを、大学入試で出ないからと言って、入試に出る科目の授業に向けたため、卒業資格がない生徒が発生したことも、入試科目を減らしたことに原因があります。大学で、易しくてよいから全必須科目で入試を行えばこの問題は起らなかったでしょう。18歳人口は1992年を頂点に急激に減少し、必然的に大学進学率は上昇する。従ってより一層多様な学生が入学して来るようになり、大学での一般・教養教育の必要性は高まる、というようなことでした。しかし、ほとんどの大学で教養部を廃止してしまいました。1992年の205万人を頂点にした18歳人口は急激に低下し、分数も出来ない大学生が現れる1998年頃には162万人となったにもかかわらず、入学者定員は増えて行きました。18歳人口が21%も減少したとき学生数は減らすどころか10%近く増やせば、大学生の学力は下がるのは当たり前ではないでしょうか。国立大学は臨時定員の分だけ減らしましたから、大きく見て5%程減らしました。でも18歳人口の減りは21%、それに対して5%減にすぎなかったわけです。それ程大学生の学力が下がったと嘆くのであれば、なぜ大学生の数を1998年の時点で21%減らそう、そして入学試験の科目を増やそうと、大学陣が主張しなかったのでしょうか。極端に言えば、大学生の学力低下は初中教育のせいではない、大学生を増しすぎたからではないでしょうか。18歳人口が更に減少して来年は130万人になります。そこで、この言い方を現在にあてはめれば、1992年頃の学生数の21%どころでなく、35%減らせば大学生の学力はまあまあということになるであろうということです。

高等学校への進学率は、1970年～1990年代に急激に上昇し、1990年には95%、現在は98%に達しています。高等学校への進学率が高まり、しかも専門高校生の割合が低くなったことに対応して、高等学校の授業に選択が

増すことは当然のことです。選択必須制が行われるようになりまして。従って医学部の学生なのに生物を学んで来ないというような事態が発生したわけです。

高等学校の進学率は100%近くなる、しかも専門高校（職業）の割合は極めて低くなる。従って高校生的一般教育で学ぶことは多様化する。従って大学へ入ってくる学生の学力は多様化する。更に18歳人口は更に減って行く。もうすぐ120万人になる。にもかかわらず大学は増え入学定員は減らすどころか増している。もうすぐ大学はどこでもよければ志望者全員が入学できる。このような事態になっているわけです。ですから全ての大学とは言いませんが、相当数の大学では、教養（学）部を再建するとか、教養教育・一般教育を専門教育に入る前に充分に行うべきでないでしょうか。



3 大学の使命・役割

18歳人口がこのように低減し120万人に過ぎなくなった一方、大学の定員数は減るところか増やして来ており、大学全入の時代が始まろうとしています。そのような時代の大学の使命や役割を考えてみましょう。

10%前後の進学率の時代における大学の使命は、エリート教育でありました。今でもこのような使命は大学に課せられていると思います。高等学校の職業教育で果たしてきた力が弱ったことを心配しています。大学の中にも、もっと実業的職業教育に徹するところが出来てきてよいと思うのです。私は、むしろ積極的に大学の中には専門学校と協力して、というか同化して行くものがあると思います。そこでは、職業の重要さ楽しさ難しさを十分に教育するわけです。その中には産業界と一体になってインターンシップをもっと積極的に、例えば一年間は産業界で働くことを教育課程の一つとするような大学があると思います。アメリカの大学の中には5年間教育を行い、そのうち1年は産業界で働くことを義務づけている所があります。こういう教育を行うことによって就職後3年でやめてしまう若者やニート族を減らしたいと思います。

それぞれの大学が最も得意とする教育や研究を中心に独自の計画を立て、実行するべきであるということです。

4 大学における教育と研究

米国の教育学者マーチン・トロウが大学への進学率と、大学の質の関係について、15%以下ならエリート教育、50%になれば大衆（マス）教育化、50%以上になれば普遍（ユニバーサル）化と言っています。

研究大学以外では教育に重点を先ず置くべきでしょう。しかし、私はどのような大学でも教員が教育に十分な情熱を傾けつつ、出来る限り研究も行うべきであると考えています。その理由は研究によってささやかでも新しいことを発見したり、発明したときの喜びを体験したり、研究の楽しみを知っていた方が、創造性や考える力を教育するとき力が入るからです。そこで理想的には集中的に教育を行い、夏期休暇に集中的に研究を行い、何年に1年とか半年のサバティカル・リープ（研究休暇）をとれるようにするというような工夫ができないものでしょうか。

今日のように大衆化した時代には、教育が第一の使命であるということは明らかでありましょう。

5 大学の自己改革

1993年に東京大学理学部物理学科に、外国人数人、日本人数人による外部評価を導入したときには大変な反対がありました。外部の人に評価されるのは、大学の自治に反するというような反対でした。しかし、これも現在では実行することが常識になりましたし、法人化した国立大学では他者評価を受けることが義務になりま

した。大学の自己改革の結果の一つは、自己点検・評価や第三者評価他者評価を実行するようになったことです。

そして産学共同研究が盛んになってきました。

1995年頃日本中の大学が申請する特許の数は、年間120くらいでした。その当時、アメリカの大学の特許の数は4,000件以上でした。しかし1996年の科学技術基本計画の出発以降急激に増えてきて、現在は1,000件に達しました。このように、産業界との協力や、特許をとるような努力には全く抵抗がなくなりました。これも又大学の自己改革の一つの表れでありましょう。

日本の大学は自己改革に励み、徐々にその効果が見えてきました。それを一挙に推し進めたのは、国立大学では法人化でした。公立大学も幾つかで法人化が行われました。私立大学もそのような流れに巻き込まれています。



6 大学の法人化

1998年7月、私は文部大臣に任命され、1999年1月より科学技術庁長官を併任することになりました。そして、宿題になっていた国立大学の独立法人化を自ら決定せざるを得なくなりました。その間、アメリカやヨーロッパ、アジア等他国の大学を調べた所、国立や公立でも法人格を持っている大学が多いこと、人事や運営において法人格を持つ方が自由度が大幅に高いこと、例えば学長や部局長の人事、財政などについて自由裁量権が大きくなり、それだけ各大学の独自性が出せること、産学官協力などがやりやすくなること等々の理由で、私も文部省全体も国立大学法人化を決意いたしました。ただ、私は教育の役割など他の独立行政法人とは大いに違う点を強調し、別の法律を作ることを主張したわけです。その結果、国立大学法人法は、他の独立行政法人のための通則とは共通の点も多いのですが、かなり根本的に違うものになりました。

私が大臣をやめた後、法人化が実現するまでの間、国立大学側も考えを進め、非公務員型で法人化にすることになりました。この事は、国立大学の人事がやりやすくなる、例えば外国人を学長にしやすいつつとか、産業界などとの兼任に対する公務員としての制限がなくなり、大学自体の判断で自由にやれるというような利点があります。

こうして、2004年4月より日本の国立大学は国立大学法人になりました。その結果、目に見えて変わったことは、学長や総長の権限が強まり、その人々の方針がどんどん実行に移されつつあることです。学長が単なるまとめ役としての帽子的存在でなく、本当に自分の考えで大学経営に当るようになりました。その結果、どんどん伸びて行く大学と、低迷している大学とが生まれつつあります。外部資金の導入がどんどんできる実力を持つ大学と、そうではない努力を要する大学に分離しつつあります。これは、法人化による光と影の一例です。

各国立大学法人は、6年ごとに中期目標を立て、中期計画案を作り、国立大学評価委員会の評価を受け、その判断に従うことになりました。

こうして外部資金導入、産官学協働等々が盛んになったことは、法人化の光の部分です。そのため、外部資金を大幅にover headして、それをういて日の当らない基礎的分野の教育や研究を支持すべきです。

国立大学の法人化の波は都道府県立さらには市立の大学の法人化をうながすことになりました。既に法人化された大学もありますし、現在考慮中の所もあると思います。国立大学の法人化の成功した点を利用し、問題は避けて、公立大学の法人化を行って下さることを念願しています。

静岡県立大学創立20周年記念事業 市民講演会「健康とくすり」を開催

市民講演会「健康とくすり」実行委員長 薬学部教授 出川 雅邦

去る10月22日(日)に本学創立20周年記念事業の一環として、また、日本薬学会広報委員会との共催として、市民講演会「健康とくすり」が静岡県コンベンションアーツセンター(グランシップ)「風」会議ホールにて開催されました。本講演会は、副題であります“「いのち」と「こころ」を守るクスリ”を市民一般の方々に広く理解をしていただくと共に、日本薬剤師研修センターから認定を受け、薬剤師生涯研修をも目的といたしました。

講演はまず、静岡県立静岡がんセンター総長 山口 建先生に「がんを治し、心を支える」という演題で行っていただきました。がん医療は、「お任せ型医療」から「患者参加型医療」へ、すなわち、がんという病変を先端技術を駆使して治すのみならず、患者や家族を支援し、その心を支える医療が今後重要であるというお話をしていただき、また、がんの解説、予防に関する数多くのパンフレットを配布していただきました。次に、毎日新聞社論説委員 青野由利先生は「クスリの倫理」という演題で、今後盛んに行われるであろう「オーダーメイド医療」や「テーラーメイド医療」から生じる倫理問題、薬の需要と供給のバランスから生じる倫理的課題など、科学記者の目から見た先端医療に伴って生じる問題を、倫理をキーワードにお話していただきました。最後は、東北大学機械系特任教授・作家 鈴木(瀬名)秀明先生の「未来のクスリを考える - 物語と薬学とヒトの心」です。先生は、「パラサイト・イブ」や「BRAIN VALLEY」など数多くの小説をお書きになり、現在は、機械工学の100年後の未来を想像し、将来の工学者の育成、未来の鉄腕アトムを作ろうとされており、そもそも本学薬学部名誉教授を父に持たれ、御本人も東北大学大学院薬学研究科博士課程を修了されており、まさに「クスリ」の専門家でもいらっしゃいます。そのお立場から、100年後のクスリをいくつかの物語を振り返りながら、想像していただきました。

一般市民の参加は、往復葉書による事前登録制という煩雑かつ短期間の募集であったにもかかわらず、約80名の方々から登録をいただき、「健康とくすり」に対する関心の深さを感じられました。その他、薬剤師の方々や、本学教職員、学部・大学院学生なども含め合計150人ほどの参加者があり、とても意義深く心に残る講演会が企画できたものと思います。

最後になりましたが、本講演会の実施に当たり、御支援と開会の御挨拶を賜りました西垣学長を始め、御協力をいただきました本学教員、事務職員の方々に厚く御礼を申し上げます。



静岡県立大学創立20周年記念事業 公開セミナー「静岡で医療福祉体制を考える」を開催

地域経営研究センター長 西田 在賢

大学院経営情報学研究科附属の地域経営研究センターは、10月13日、県立大学創立20周年記念事業「静岡で医療福祉体制を考える」を、創立20周年記念事業実行委員会共催、静岡新聞社・静岡放送後援により、元世界医師会長をはじめとする日本医療界に携わる識者三人をお招きし、また、御来賓に静岡県医師会長、静岡県がんセンター総長、浜松医科大学長をお迎えして、県内外から160名余りを集めて谷田キャンパスで開きました。

以下は、翌14日の静岡新聞朝刊総合欄に載った記事からの抜粋です。

「宮城県病院事業管理者で東北大医学部の久道茂名誉教授は『医学・医療の品格』と題して講演し、医療界全般で品格を落としている問題点を指摘した。国立保健医療科学院の篠崎英夫院長は、医療政策と地域医療について解説し、『この五年間で行われた三回の診療報酬のマイナス改定も、医師の地域偏在の要因の一つでは』などと指摘した。元日本医師会長で日本医療機能評価機構の坪井栄孝理事長は社会保障制度について論じた。」



国際交流

海外の3大学と国際交流協定を締結

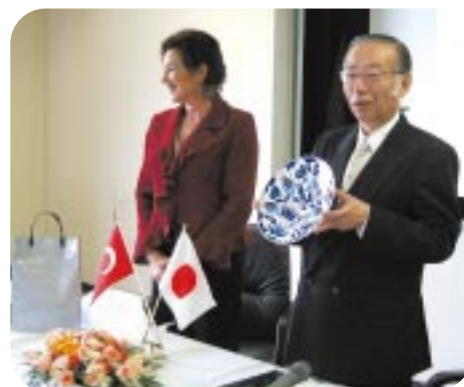
去る11月7日、本学とボアジチ大学（トルコ）、延世大学（韓国）、コンケン大学（タイ）との間で、それぞれ学生、教員の交流、学術協力等を目的とした大学間交流協定が締結され、その調印式が本学においてとり行われました。これまでに本学では、海外の9大学・研究機関と国際交流協定を締結していますが、トルコ、韓国、タイの大学とは初の大学間交流協定締結となります。

今回、協定を締結した各大学は、それぞれの国を代表するような名門大学であり、研究者、学生との交流を通じ、本学の研究水準の向上やグローバルな視野をもった優れた人材の育成が期待できます。

（1）ボアジチ大学～トルコ有数の国立総合大学、大学の国際化を推進～

ボアジチ大学は、1971年創立、文理学部、工学部、経済・経営学部、教育学部、近代トルコ史研究所、地震研究所、生物医学研究所、環境科学研究所、科学技術研究所、社会科学研究所などの研究機関をもつ学生数約11,000人のトルコ有数の国立総合大学です。諸外国の大学と姉妹大学提携を結び、大学の国際化に力を入れており、親日国家という環境のもとで日本に関する研究も行われ、同地での日本語教育と対日理解の促進の中心的役割を果たしています。

本年6月、静岡県知事を団長とする静岡県学術文化交流団がトルコを訪れた際、ボアジチ大学を訪問し、同大学の副学長等と意見交換を行った結果、本学とボアジチ大学との間で研究教育面での協力関係を構築する有意性を相互に確認し、その後、協定締結に向けて作業を進めてきたものです。



ボアジチ大学・ソイサル学長(左)と西垣学長

（2）延世大学校～韓国の有名私立名門大学、韓国語教育機関としても世界へ多くの人材を輩出～

延世大学校は、1885年プロテスタントの宣教師によって設立され、1957年に合併し、私立総合大学となり、現在では、20学部95学科18大学院131研究施設を有し、学生数は約39,000人で韓国でも有名私立名門大学の一つに数えられています。また、付設の韓国語学堂は、1959年に韓国語教育機関として設立され、以来、世界120カ国以上、3,000人近い卒業生と50,000人を超える履修生を送り出しています。

昨年9月から1年間、延世大学校の柳光秀教授を本学国際関係学部の客員教授として招聘し、共同研究等を行う間、同年11月に延世大学校教授陣一行が本学を訪問し、西垣学長や伊豆見国際関係学部教授等と会談し、大学間協定締結へ向けて交渉を開始することを相互に確認し、その後、協定締結に向けて作業を進めてきたものです。



延世大学校・鄭副総長(左)と西垣学長

（3）コンケン大学～タイ王国の地方大学として3大中心大学の一翼を担う～

コンケン大学は、1964年創立、16の学部を有し、大学院、附置研究機関、博物館等も併せもち、タイ王国の地方大学として3大中心大学（北のチェンマイ大学、東北のコンケン大学、南のソククラ大学）の一つとされています。学部、大学院に、外国人受入れを前提としたインターナショナルプログラムがあり、学生数は約17,000人です。

平成15年11月、本学の薬学部とコンケン大学薬学部・医学部との間で学部間協定が締結され、さらに、昨年の静岡健康・長寿学術フォーラムで、コンケン大学看護学部教授が講演を行った後、本学看護学部を訪問し、大学院生の指導を行うなどの交流が続き、学部間交流の進展をベースに、大学間協定を締結していくことで作業を進めてきたものです。



コンケン大学・サコルチャイ学長(左)と西垣学長

アリゾナ大学薬学部臨床薬学Michael Katz准教授による特別講義を開催

薬学部・薬物動態学分野 教授 山田 静雄



去る11月8日、本学の創立20周年記念式典のため来日されたアリゾナ大学薬学部臨床薬学のマイケル・ケイツ (Pharm. D.) 准教授が、「Teaching Students to become Pharmacists (薬剤師育成のための学生指導)」をテーマに、米国での臨床薬剤師業務と臨床薬学教育について特別講義をされました。当日は、薬学部3年生、大学院生、教職員など約150名が熱心に耳を傾けていました。

本学とアリゾナ大学とは、2003年に大学間学術交流協定が締結されて以来、主に薬学部教員の相互交流が行われています。



リール政治学院・院長Jean-Louis Thiebault教授による特別講義を開催

国際関係学部 助教授 剣持 久木

創立20周年記念式典のために来日されたリール政治学院・院長ジャン＝ルイ・ティエボー教授が、11月6日午後1時より、「ヨーロッパの中心としての仏独関係」と題した特別講義を行いました。長年の敵対関係を乗り越えて、第二次世界大戦後には欧州統合の中心として和解して今日に至る両国の歩みを解説され、国際関係学部生、大学院生、教職員など、教室収容定員(150人)を大幅に上回る聴衆が熱心に耳を傾けました。講演後の質疑のなかでは、「日韓関係へのアドバイス」として、仏独和解過程において青少年交流が果たした役割の重要性を指摘されるなど、次代を担う学生にとっても有意義な内容でした。

今回の来日に際しては、11月7日の記念式典の他、8日には東京日仏会館での講演もこなすなど過密スケジュールでしたが、スケジュールの合間をぬって、昨年、交換留学生としてリール政治学院に派遣され帰国した本学学生の案内で、駿府城内の茶室を訪問するなど、同行されたリール政治学院国際交流スタッフ、ティファニー・ブルヴォ女史共々、静岡滞在を楽しんでおられました。本学とリール政治学院の間では2005年に大学間交流協定が締結され、現在、交換留学第二期生(2人)がリール政治学院に派遣されています。



国際交流協定大学から教員が来学

県立大学と学術交流協定を結んでいるロシアのモスクワ国立国際関係大学(MGIMO)から同大学国際関係学部日本語・朝鮮語・モンゴル語・インドネシア語学科長のグレヴィッチ・タチアーナ教授が来学され、11月15日から1ヵ月間滞在されました。同教授は、1994年及び2000年に続き3回目の本学訪問となり、「日本とロシアにおける外国語としての日本語の教育方法の比較研究」をテーマに本学教員と共同研究をされました。



国際交流協定大学から短期交換留学生在が来学

去る12月2日、県立大学と学術交流協定を結んでいるフィリピン大学から短期交換留学生在が来学されました。

今回、来学されたのは、フィリピン大学図書館情報学部4年生のトーマス・ロゼリンさん(21歳)で、平成19年3月まで静岡市清水区内にホームステイをして、本学で勉強をします。フィリピン大学では、図書館情報学を専攻しており、図書館業務に携った経験もあるそうです。本学では、国際関係学部の小幡教授の指導を受けながら、日本語や日本文化等の勉強をしています。

4ヵ月間という短い期間ではありますが、初めての日本滞在でたくさんの思い出と友人を得て帰国されることを祈っています。



「第7回日中健康科学シンポジウム」を開催

薬学部 教授 今井 康之

静岡県立大学では、中国浙江省医学科学院との間で、「日中健康科学シンポジウム」を隔年で行ってきました。今年は、11月5日(日)と11月6日(月)に、静岡県立大学において開催されました。浙江省医学科学院の張幸院長、陳勇副院長をはじめとして、16名の研究者が来日し、お互いに研究成果を発表しました。今回のシンポジウムは、静岡県立大学創立20周年記念事業の一環として、また、静岡県立大学が平成14年度から実施している21世紀COEプログラム「先導的健康長寿学術研究推進拠点」との共催で実施されたものです。

開会にあたり、辻副学長からおよそ20年にわたるこのシンポジウムの歴史が写真とともに紹介され、息の長い国際交流が続いていることをあらためて実感しました。今回の特徴として、中国だけではなく大学間協定を結んだタイ王国のコンケン大学薬学部や、チュラロンコン大学薬学部の食品科学研究室などから合計3名、韓国のソウル大学薬学部と延世大学から合計2名の海外からの参加者がありました。静岡県立大学の薬学部、食品栄養科学部、環境科学研究所から合計11講演、中国浙江省医学科学院から9講演、韓国ソウル大学からHye-Kyung Na教授による特別講演が行われました。講演では、日本側、中国側ともに必ずしも得意とはいえない英語での講演でしたが、今回は県立大学から若手教員を中心に発表がなされたことと、例年よりも活発に英語での討論が行われたという手ごたえを実感しました。シンポジウムの準備、会場の設営や運営についても、多くの若手教員、大学院生、留学生の協力によってスムーズに進行がなされたと思います。

また、講演だけではなく、大学院生を中心としたポスターによる発表も25演題行われました。静岡県立大学に現在在籍する留学生として、バングラデシュ、パキスタン、モンゴルからの大学院生もポスター発表をしました。県立大学の若手教員や大学院生、留学生、海外からの参加者が熱心にポスター会場で研究内容についての討論を英語で行い、ポスター会場は大変盛況でした。静岡県立大学が日中のみならず、アジア各国の学術交流の拠点として成長しつつあるといえます。



第11回静岡健康・長寿学術フォーラムサテライトシンポジウム/ 21世紀COEプログラム大学院生プレゼンテーションスキルセミナーを開催

第11回静岡健康・長寿学術フォーラム実行委員長(食品栄養科学部長) 木苗 直秀

第11回静岡健康・長寿学術フォーラムは「自然からのめぐみ 薬食同源 21世紀COEプログラムからの発信」をテーマとして10月20日(金)、21日(土)にグランシップで開催されました。これに先立って10月19日(木)にサテライトシンポジウムが本学小講堂で開催され、E.M.Morris教授(米国、ニューヨーク州立大)には「Flavonoid-drug interactions: Effects of flavonoids on ABC transporters」、高山秀一准教授(米国、ニュージャージー医学歯科大学)には「Global roles and responsibilities for dietetics professionals in promoting health and longevity in society」の各テーマでわかりやすく講演していただきました。その後、プレゼンテーションスキルセミナーでは、本学薬学研究科(鈴木真由美さん、浦上武雄君)と生活健康科学研究科(出口雄也君、小倉有子さん)の大学院博士後期課程の学生による5分間の研究成果発表があり、それに対して上記3名の講師及び本学国際関係学部のKirk C. Hyde先生らによる助言指導が行われました。会場には200余名が集まり、特に英語でのスピーチ方法に対する関心の深さが感じられました。



「しずおか新産業技術フェア2006」で本学の産学連携成果をアピール!

県内の中小企業が新製品・新技術を持ち寄り、新たな販路や提携先を開拓するためのイベント「しずおか新産業技術フェア2006」が10月12日から14日までの3日間、ツインメッセ静岡で開催されました。

フェアのオープニングのテープカットには、石川静岡県知事等とともに西垣学長も参加して華やかにスタートしました。3日間の会期中には合わせて7,283人が来場し、新製品・新技術のPR・商談が行われました。

当フェアには、IT、医療・健康、環境・リサイクル、生活製品、産業機器等のコーナーが設けられ、産学連携コーナーとして大学・支援機関のゾーンなど、合わせて105団体がブース展示を行い、本学は東海大学、静岡理工科大学等とともに産学連携のPRを行いました。

また、展示運営には、本学の産学連携推進委員が交代で当たり、COEや都市エリア、公開講座等の事業をパネルやパンフレットで説明し、産学連携の成果であるギャバチョコやカスピ海ヨーグルト、テアニン緑茶、べにふうき緑茶等の製品展示を行いました。

特に、ギャバチョコやお茶の試飲・試食が好評であり、会場の中心に位置したこともあって600名以上の方が立ち寄られました。更に、テレビでも放映されるなど、本学の産学連携を広くPRすることができました。

産学連携推進委員15名の方々の運営参加により、中小企業から一般県民まで広くアピールできたことを御報告するとともに感謝申し上げます。



特許庁と共催で「知的財産セミナー」を開催

本学では法人化後の体制整備検討の中で、特許庁の支援により、知的財産のスペシャリストである橋野憲親知的財産統括アドバイザーを本学客員教授として受け入れて、知的財産管理体制の整備検討を進めているところです。

去る10月25日に、この知的財産体制構築推進の一環として、特許庁から特許庁幹部である特許審査第二部の南孝一部長を講師に迎え、本学と特許庁の共催により「知的財産セミナー」を開催しました。

始めに西垣学長の挨拶のあと、南部長による「特許情報から見る技術動向～大学における知的財産の活用に向けて～」をテーマとして基調講演をいただきました。

講演では、特許情報を研究の前に調査することで、企業がどのような分野に興味があるかが分かるため、企業との共同研究を進める際に有効な情報が得られることや、国の知的財産戦略、大学の知的財産活用に向けた体制構築への期待などが講義されました。

その後、第二部として、本年6月から特許庁の事業で本学へ派遣されている橋野憲親客員教授による「静岡県立大学の知的財産活用の課題と提案」をテーマにした講演が行われました。

この講演の中で、知的財産の管理活用について、国や県から本学に期待される役割や、本学の知的財産の現状と課題、本学の目指すべき方向等について分析や提言がなされました。

その後、来場者との質疑に移り、法人化により発明の権利が教員個人から大学に移った場合の課題や問題点について、熱心な質疑が行われました。

会場には定員を上回る約60人の参加者が集まり、熱心に聴講していただくとともに、活気にあふれた意見交換が行われ、大変意義深いセミナーとなったことを御報告するとともに、参加・協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。



しずおか環境・森林フェアに環境科学研究所も参加！

10月20～22日の3日間、ツインメッセ静岡にて「第4回しずおか環境・森林フェア」が開催されました。本フェアは、環境配慮型製品やサービス、県産材住宅等の利用促進や森林の多様な役割を県民や事業者の方に広く知ってもらい、環境ビジネスの振興と森林整備の推進及び消費者のグリーン購入意識の醸成を目的として、毎年開催されています。環境科学研究所も今年は、「環境にやさしい製品づくりへの取り組み」をテーマに、廃プラスチックの利用やそのままならば廃棄物になってしまうキトサンを利用した食品や化粧品に関する展示を行いました。3日間で延べ3万人以上が参加されたようです。環境への関心の高さを数字が示しています。産・官・学の取り組みが多くブースで紹介されていました。間伐材の利用がこれからの鍵ではないかと思いました。

最終日には、同じ会場で環境研究交流しずおか集会在「富士山と環境保全」をテーマに開催されました(別稿参照)。子供からお年寄りまで参加できるフェアです。来年は是非参加され、環境のことをいろいろ考えながら楽しめることをお勧めします。



～ 地域に根ざして情報発信！ ～

環境研究交流しずおか集会を開催

環境科学研究所・地域環境啓発センターの企画で、県民一般を対象とした環境研究交流しずおか集会在、10月22日(日)、ツインメッセ静岡にて開催されました。この集会は、環境科学研究所に加え、静岡県環境衛生科学研究所、静岡県静岡工業技術センターの県内三機関が主催する事業で、今回で10回目を迎えました。

今年度は、集会テーマを「富士山 その神秘なる山の景観と環境保全」とし、基調講演として、渡邊 新宮司(富士山本宮浅間大社)より「山と日本文化」についてお話があり、《日本人の山、水への信仰が環境を守ってきた》ことが強調されました。次に、景観面から富士山を被写体として撮り続けている鈴木義二氏(アマチュア写真家)より、「富士山写真トークショー～煌きの一瞬～」が講演されました。また、生態系という視点から板井隆彦助教授(食品栄養科学部)より、「柿田川の魚類～底生魚類の特異的な生態～」が、さらに、環境保全の側面から岩堀恵祐教授(環境科学研究所)より、「改善された富士山トイレ問題」が講演されました。最後に、坂田昌弘教授(環境科学研究所)を座長として、参加者からの質問を中心とした総合討論が行われました。

現在、静岡県と山梨県が共同で富士山の世界文化遺産に向けての取り組みを進めており、その詳細を説明したパネル(静岡県生活・文化部世界遺産推進室作成)が集会場にて展示されました。

参加者数は約100名で、本集会テーマに対する関心の高さをあらためて知ることが出来ました。また、アンケート結果から、充実した内容であり満足できたとの意見も寄せられただけでなく、テレビのニュースや新聞紙面においても取り上げていただき、紹介されました。なお、本事業は、静岡新聞社・静岡放送の御後援をいただき開催いたしました。



総合討論から(写真左より渡邊 宮司、鈴木 氏)

本学教員の著書紹介

『健康と長寿への挑戦 食品栄養科学からのアプローチ』

南山堂 全159頁 2006年11月7日刊行 定価1,995円
食品栄養科学部長 木苗 直秀

1987年4月、日本で唯一の名称を持つ学部として誕生した食品栄養科学部は「21世紀の食と健康を科学する」ことをめざして、食品学科と栄養学科がライフサイエンスを積極的に取り入れ、日夜教育・研究に励んできた。

このたび、創立20年の節目の年を迎えたので、学部教員が自らの研究成果を科学者、学生をはじめ一般の方々

に報告させていただくため、ここに「健康と長寿への挑戦 食品栄養科学からのアプローチ」を発刊した。

静岡県の特産物である緑茶、みかん、わさびの科学とともに食品と栄養に関する基礎的、応用的諸問題に果敢にチャレンジしてきた成果を著したものである。本学学生ホールの書店で手に入れることが可能なので皆様に御一読いただけたら幸いである。



『免疫と栄養 - 食と薬の融合 - 』

幸書房 全338頁 2006年5月25日刊行 定価5,880円
食品栄養科学部 教授 横越 英彦

社会生活が多様化し、また、複雑化する中で、多くの国民は、色々なストレス（ストレッサーを含め広義に解釈）にさらされている。子供から大人まで、また、達観したように思われるお年寄りにも、多くのストレスのしかかっている。最近の研究では、ガン、高血圧、心臓病、動脈硬化、糖尿病、脳梗塞、認知症、神経疾患、アレルギー疾患など、多くの生活習慣病の誘因にストレスが関与していることが明らかにされてきた。疲れているときや、心身ストレスを受け精神的に参っているときには、風邪などを引きやすく、また、体調も崩しやすいことを、経験的に知っている。そのようなときには、気分

的に落ち込み、何事にも関心を示さず、食欲も無くなるというような行動の変化も見られる。すなわち、ストレス状態時には、病気にかかりやすいこと（免疫能の低下）そして、ストレスの発現には行動への影響など、脳機能が密接に関与していることは明らかである。

栄養神経科学の立場では、栄養（食品成分）が脳内代謝に影響を及ぼし、脳の働きにも密接に関わっており、ある種の行動の変化が引き起こされることも明らかである。本書では、栄養状態の改善で病気の感染を予防し、また、病気や術後からの回復を促進するような予防医学的な事実についての研究成果をまとめたものである。



『(写説) 占領と単独講和』

ビジネス社、全159頁、2006年9月21日刊行 定価1,785円
国際関係学部 教授 前坂 俊之

昭和史を考えるビジュアル版シリーズの1冊。占領中の1949年（昭和24年）から、1951年（昭和26年）のサンフランシスコ講和条約の締結による独立、造船疑獄事件により吉田内閣がつぶれる1954年（昭和29年）までの計6年間の政治、国際状況、経済、社会などの出来事を写真と文章で記録した。この時期は戦後の政治、社会が敗戦の大混乱の中から、新しく生まれ変わって戦後民主社会が誕生していく最もスリリングな激動の時代といえる。また、この6年間はちょうど吉田茂首相の在任期間中とピッタリと重なる。

今、問題となっているGHQ（連合軍総司令部）による押し付け憲法、朝鮮戦争、自衛隊の発足などの再軍備、日米安保条約、シャープ税制、ドッジラインなど経済、

産業政策の決定はGHQが日本側に強制した面が強いが、吉田はそれと戦い、交渉し、譲歩しながら戦後の日本の国家、政治、経済の基本的フレームを決定したわけで、その背景と歴史的経緯をしっかりと解説した。

このGHQと吉田内閣との合作による日本改革が成功したために1956年（昭和31年）には「もはや戦後ではない」（経済白書）と宣言して、以後、高度経済成長の波に乗り、日本は奇跡的な復興を遂げ、以後半世紀にわたって国内では戦争のない、豊かな経済、生活大国に発展していったのである。現在の日本をよりよく知るためには、この基礎を築いた吉田内閣の政策決定の背景、功罪を知る必要があるとの思いから、書き上げた1冊である。



受賞

21世紀COE研究成果：日本排尿機能学会 学会賞（論文部門）を受賞

平成18年9月6～8日に開催された第13回日本排尿機能学会(笹川記念会館で開催)で、「ラットの排尿機能及び下部尿路受容体に対するノコギリヤシ果実抽出液の薬理作用」(鈴木真由美、他7名、日本排尿機能学会誌16, 191-201, 2005; J Urol, 173, 1395-1399, 2005、薬物動態学分野：山田静雄教授)が学会賞(論文部門)を受賞しました。排尿機能に関する発表論文の中から学会賞審査委員会による厳正な審査を経て選考されました。前立腺肥大の民間薬として伝承されてきたノコギリヤシ果実抽出液の排尿障害改善作用に関する新たな作用機構を明らかにしたことが受賞理由です。



日本排尿機能学会は、前立腺肥大や過活動膀胱に伴う排尿障害の病態や治療薬に関する臨床医を中心とした泌尿器系専門学会で、近年、排尿に関する問題が高齢者のQOL疾患としてクローズアップされ、新規治療薬への関心の高まりとともに会員数は急増し(平成17年度新入会員が132名)、1,000名を超えました。日本排尿機能学会の理事会・総会において、山田静雄教授はこれまでの学会への貢献が高く評価され、昨年より評議員(52名)、本年度より理事(29名)に選出されました。医学部以外出身者では初めての評議員、理事です。

フォーラム2006：衛生薬学・環境トキシコロジーで優秀若手研究者賞を受賞

平成18年10月30～31日に東京で開催されたフォーラム2006：衛生薬学・環境トキシコロジーで薬学研究科医薬生命化学講座・修士1年の菅野慎吾さんが優秀若手研究者賞を受賞しました。この賞は、優れた講演要旨を提出した大学院生に授与されるもので、今回191演題の中から選ばれました。受賞した講演題目は「新規環境下でのラット海馬における亜鉛のユニークな応答」でした。



薬学研究科修士1年 菅野慎吾さん

平成18年度栄養関係功労者を表彰

去る10月26日、つくば国際会議場(茨城県つくば市)において平成18年度栄養関係功労者厚生労働大臣表彰式が行われ、食品栄養科学部の野沢龍嗣教授が栄養士養成功労者として表彰されました。栄養士養成功労者とは、栄養士、管理栄養士養成のため特に顕著な功績があったと認められる者であり、この表彰は、昭和51年から毎年実施されております。平成13年度からは、連続して、本学の教員が静岡県の代表として推薦され、表彰を受けています。



野沢龍嗣教授

情報教育シンポジウムSSS2006でデモンストレーション賞を受賞

去る8月26～28日に開催された(社)情報処理学会・コンピュータと教育研究会主催の情報教育シンポジウム「Summer Symposium in Sengokuhara 2006～情報教育のさらなる未来～」において、経営情報学部・数学研究室のメンバー(学生・経営情報学部3年・森下真衣さん、山上美紗さん、芥川美由紀さん、同4年・渋沢良太さん、旗持静香さん、経営情報学研究科修士1年・堀口貴光さん、経営情報学部OB・平成18年3月卒・北村真也さん、教員・経営情報学部・鈴木直義教授、湯瀬裕昭助教授、国際関係学部・青山知靖助手)の論文「ソフトウェア開発実践教育のための開発進行支援システム」が「デモンストレーション賞」を受賞しました。この受賞対象のソフトウェアは、8月18日から22日までの5日間に静岡地区で開催された全国少年少女草サッカー大会の運営全般を処理する情報システム(Webページを含む)を数学研究室が開発する際に、それを支援するために作成されたソフトウェアです。



また、このシンポジウムにおいて、アルバイトとして運営を支援したメンバー(経営情報学部2年・酒井美那さん、同3年・森下真衣さん、山上美紗さん、芥川美由紀さん、同4年の渋沢良太さん、経営情報学研究科修士1年・張正義さん、吉田雄紀さん)が、その自律的な活躍がめざましく、運営に多大な貢献をしたということで、全く前例のない感謝状をいただきました。

（財）日本環境整備教育センター「研究奨励・楠本賞」を受賞

環境科学研究所の宮田直幸学内講師は、平成18年10月5日、第19回全国浄化槽技術研究集会での発表課題「腸球菌を新たな指標とした小型合併処理浄化槽での糞便汚染評価手法の提案」[共同研究者：岩堀恵祐（環境科学研究所）杉田詠美（環境物質科学専攻修了）、他1名]が優秀研究課題に選出され、研究奨励・楠本賞を受賞しました。



宮田直幸学内講師

研究助成採択

2006年度 住友財団・環境研究助成

研究代表者：国際関係学部 助教授 児矢野マリ
研究分担者：国際関係学部 専任講師 伊藤一頼
龍谷大学法学部 教授 高村ゆかり
海上保安大学校海上警察学講座 専任講師 鶴田順
研究課題：環境条約の国内の実施に関する研究
- わが国における国内実施法令等の定立・執行過程を中心に -

研究代表者：環境科学研究所 光環境生命科学研究室 助教授 伊吹裕子
研究分担者：環境科学研究所 光環境生命科学研究室 助手 豊岡達士
研究課題：現代の皮膚がん増加における環境汚染と光（紫外線）の複合影響の寄与について

平成18年度 （財）クリタ水・環境科学振興財団研究助成

研究者：環境科学研究所 光環境生命科学研究室 助教授 伊吹裕子、助手 豊岡達士
研究課題：遺伝子修復分子の挙動追跡法を利用した新規高感度水環境評価手法の開発

教員の人事

採用

（10月1日付け）

石井 剛志 食品栄養科学部助手
藤巻 光浩 国際関係学部助教授
岩倉さやか 国際関係学部講師
近藤 隆子 国際関係学部助手
小池奈津子 看護学部助手
榊原 啓之 環境科学研究所助手

退職

（9月30日付け）

池田 周 国際関係学部助手

（10月31日付け）

栗田 拓朗 薬学部助手

十 計 報

内園耕二初代学長 逝去



本学の初代学長を務められました内園耕二氏が、平成18年10月25日、御逝去されました。享年90歳。

内園初代学長は、昭和60年、県立静岡女子大学の第7代学長に就任し、静岡薬科大学、静岡女子大学、静岡女子短期大学の県立3大学の統合に尽力され、昭和62年、本学の創立とともに初代学長に就任されました。平成5年3月までの在任中、海外の3大学と国際交流協定を締結し、大学間の学術交流を推進するなど数々の功績を残されました。

ここに謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

ニューカッスル大学夏期語学研修に参加して

国際関係学部 国際関係学科1年 青嶋 奈保美

今年の夏休みに1ヵ月間、イギリスのニューカッスル大学の夏期英語語学研修に参加しました。この1ヵ月間で、とても多くのことを学ぶことができ、この研修に参加できて本当に良かったと思っています。

【語学研修スタート】

私の語学研修は、イギリスへ向かう飛行機の中からすでに始まっていました。イギリスの航空会社を利用したため、客室乗務員はほとんどイギリスの方で、会話はすべて英語で行わなければなりません。英語の勉強は日本で何年もしてきましたが、今まで外国の方と英語で会話する機会は授業中などの極限られた場所ではなかったので、私にとっては英語を使うということ自体が新鮮なことでした。これからの1ヵ月間への期待で胸をいっぱいにし、イギリスへと向かいました。

寮に着いて、はじめに友達になったのは、隣の部屋の台湾の子でした。私が部屋に着くとすぐ、私の部屋にやってきて自己紹介をしていってくれました。親切な彼女の挨拶に、とても感動したことを覚えています。これからの楽しい1ヵ月を予感させる出来事でした。

【授業での出来事】

ニューカッスルに着いて、2日後にクラス分けテストを受けました。授業は月曜から金曜まで毎日あり、月・水・金曜日の午後にはオプションの授業もありました。私のクラスメートには、日本人、韓国人、エジプト人、カタール人、ギリシャ人、トルコ人、ドイツ人がいました。筆記テストでは同じくらいのレベルだったはずなのに、私は最初の授業の時、みんなのスピーキング力に驚きました。どの人も、まるでネイティブのように英語を話していました。英語の中でも、「話す」ということが最も苦手な私は、正直とても落ち込みました。しかし、クラスメートの「完璧な英語ではなくても恐れずに使うことが大切なのだ。」という言葉に励まされ、そこからは私も自分から積極的に話すようになりました。彼女の言葉には、今でもとても感謝しています。



最後の日にクラスメート全員で

【貴重な体験】

授業以外でも、実に多くのことを経験することができました。その中でも一番私にとって貴重だったことは、異文化圏の人たちと交流が持てたことです。例えば、週末のバス旅行の時に、後ろの席のドイツ人に日本語を教えてほしいと言われ、お互いにドイツ語と日本語を教えあったことがありました。「ありがとう」、「こんにちは」など簡単な単語でしたが、お互いの国について話しながらお互いの言語を覚えあい、とても楽しい経験をすることができました。また、年が近かったこともあり、台湾の子たちとは一番長い時間一緒にいました。彼らは日本の文化についてとても興味を持ってきていて、お互いの国や将来の夢などいろいろなことについて夜遅くまで語り合ったり、一緒にニューカッスルの街に遊びにいたり、お互いの国の料理をご馳走しあったこともありました。このように例を挙げればきりがなくたくさんありました。お互いに完璧な英語ではなかったけれども、伝えようとする気持ちを持っていれば、大丈夫なんだということがわかりました。この研修の一番の魅力は、このように様々な国の人に出会うことができるということだと思います。みんなと1ヵ月をともにしていくうちに、英語の学習はもちろんですが、同時に、様々な国同士の人でもみんな仲良くやっていけるということを改めて実感することができました。



週末バス旅行、Lindisfarneにて

この1ヵ月を振り返ってみると、本当にたくさんの貴重な経験ができ、とても充実した1ヵ月だったと思います。この経験を大切に、これからも英語を頑張って上達させていきたいです。最後に、この研修で関わったすべての人に心から感謝申し上げます。

オハイオ州立大学夏期語学研修に参加して

国際関係学部 国際言語文化学科1年 宇藤 千紗

7月31日から8月18日までの3週間、オハイオ州立大学夏期語学研修（通称SSEP）に参加してきました。初めてオハイオ州立大学に到着した時の私は、期待で胸が膨らむ一方、不安な気持ちも少なからずありました。しかし、研修が終わる頃には、全身が自信と新たな希望で満ち溢れ、ずっとオハイオにいたいとまで思うようになっていました。一体何が私をここまで変えたのでしょうか。私がオハイオで得た素晴らしい経験の一部を、ここで御紹介します。

【Conversation partner】

私のパートナーのShayは、自分の考えをしっかりと持った凛とした女性でした。彼女は私を様々なところへ連れて行ってくれました。中でもとりわけ楽しく印象深く思い出されるのは、一緒にゴスペル音楽のコンサートへ行った時のことです。コンサート会場は大勢の客で賑わい、皆、曲に合わせて手を叩き、叫び、歌い、そして踊っていました。彼らの熱狂振りは想像以上にすさまじく、自分も含めそこにいる人々は皆、ある種の一体感に包まれていたように思います。多くの人種が共に暮らしているアメリカでは、このような一体感こそが、国民を一つにまとめているのではないかと思いました。また、ゴスペルという音楽に初めて



カンパセーションパートナーのShay

触れ、今まで知らなかった宗教信仰のあり方を知ることができました。このコンサートを境に、私はShayとより一層仲良くなったように感じました。

【Home Stay】

この研修中で最も楽しく思い出深い体験となったのは、2泊3日の週末ホームステイです。私のhost parentsのAdaとRussは、とても優しく温かく、私は本当に、彼らと自分が本物の家族であるかのように感じました。ホームステイ中に、アメリカと日本の家族の違いを感じた場面が多々ありました。その一つが、AdaとRussの結婚記念日を、彼らの娘夫婦の家でお祝いしたことです。娘のAmyが買ってきたケーキには、チョコレートの文字で「結婚記念日おめでとう」と描かれていました。私はこれにとっても驚きました。私の知る限りでは、日本では結婚記念日を家族で祝うということは珍しく、さら

にそれを本人達ではなく子供が祝うという考えは、想像したこともありませんでした。しかし、結婚記念日とは家族の始まりの日であり、家族をとて



ホームステイ先の庭のブランコで

も大切にされる彼らにとって、その日を祝うのは全く当然のことなのでしょう。私は彼らの家族への愛情の深さに感心し、また自分もその一員になれたことをとても光栄に思いました。

【『英語力の向上』は過程】

オハイオ語学研修の柱のひとつであった『英語力の向上』は、この研修の本当の目的ではなかったように思います。それというのは、この研修では英語を使うことが当たり前であったので、私たちの英語力は意識しなくとも自然に磨かれていったのです。英語を使うことはあくまで授業や会話での過程であり、目標はもっと高いところにありました。目標はなかなか達成できないものですが、過程はいつの間にか乗り越えているものです。この研修が終わる頃には、参加者達は皆、『英語力の向上』という過程を知らぬ間に乗り越えていました。

【新たな自分の発見】

では、この研修の本当の目標とは何だったのでしょうか。私はこの研修を通じて、新たな自分 - 物事に対してポジティブ&アクティブで、自分のいる現在を心から楽しむことのできる自分 - を発見しました。新たな自分の発見は私に大きな自信を与え、それは英語を話す自信へとつながりました。私の英語力はもちろんまだ完璧ではありませんが、私は今、「自分は英語を話すことができる。」と自信を持って言えます。この自信こそが私がオハイオで得た最も大切なものであり、そして、これからの語学力向上のために最も必要となるものです。

この研修中に体験したこと、感じたことのすべては、私の人生の糧となり、これからの私の支えとなって行くでしょう。このような研修に参加させていただいたことを、とても光栄に誇らしく思います。澤崎先生をはじめ、このプログラムを支えてくださった先生方、現地でお世話になったスタッフの方々、そして研修を通じてお世話になったすべての方々に、心より感謝申し上げます。

オハイオ州立大学インターンシッププログラムに参加して

国際関係学研究科 修士課程2年 山下 裕加

【SLIPプログラム】

2006年8月、SLIP (Shizuoka Language-teaching Internship Program) に3週間参加し、アメリカのオハイオ州立大学付属英語機関 (ALP) でインターンシップとして教育実習を体験させていただきました。SLIPの研修内容は、英語を第二言語として学習する人たちに対して、英語で英語を教えるというものです。

【授業見学】

3週間のプログラムの中で、最初の2週間はALPで行なわれている授業の見学をしました。朝の8時30分から午後2時20分までの授業を、日替わりで様々なレベルを見学しました。時には授業に参加させていただき、ALPの授業に早く慣れるよう努力をしました。特に自分が担当するクラスを見学したときには、そのクラスの生徒達となるべくコミュニケーションを取るよう心がけました。授業の後は、アドバイザーの先生とその日の授業見学から学んだことや疑問点などを話し合ったり、授業についてのわからなかったことなどを授業担当の先生に質問に行ったりしました。



アドバイザーの先生と

【教育実習】

3週間目は、実際に自分で授業を担当しました。私が担当したのは2クラスで、1つは教科書を使用したReading・Writing中心の授業、そして、もう1つはコミュニケーションスキルを学ぶ授業でした。前者のクラスの生徒は8人で、サウジアラビアや台湾、韓国と様々な国の生徒がいました。最初は緊張し、思うように進行することができませんでした。生徒たちが積極的に発言をしてくれたり、質問等も理解できている生徒が発表してくれたり、私をフォローしてくれました。そのおかげで徐々に授業の進行にも慣れ、自分なりに工夫して授業を行なうことができました。

コミュニケーションの授業は、生徒は7人で全員が男性でした。この授業は日常生活の会話のロー

ルプレイを練習するというものでした。私は、主に会話に必要な単語やフレーズの意味を説明したり、ロールプレイのモデルを行なったりしました。単語やフレーズの意味を英語でわかりやすく説明することは非常に難しく苦労しましたが、自分自身にとってもとても良い勉強になりました。生徒や先生方のサポートのおかげもあり、授業はとても有意義なものとなりました。

【SLIPから学んだこと】

SLIPでの3週間で、私は非常に多くのことを学ぶことができました。外国での英語の授業に教える側として参加したのは初めての経験でした。様々な国の生徒たちが集まるクラスで授業をすることは容易なことではありません。ALPの先生方は、いかに生徒の注意を引きつけ楽しく学習させるかという点で非常に多くの工夫をしていました。また、教師が一方的に行なう授業ではなく、生徒とコミュニケーションを取りながら授業を進行していくことが大切であるということ学びました。

英語で英語の授業を行なうという初めての経験を通して、私自身大きく成長することができました。また、英語を教えることに対して自信を得ることができました。研修を終えた今は、この研修で学んだことを実際の教育現場で生かしていくことを目標としています。この経験は、必ずこれからの人生において大きな役割を果たすものと確信しています。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった静岡県立大学の関係者の皆様とオハイオ州立大学の関係者の皆様にこの場を借りてお礼を申し上げます。



担当したリーディングクラスの生徒・先生と

平成18年度食品栄養科学部・生活健康科学研究科インターンシップ報告

生活健康科学研究科 教授 酒井 坦

昨年度から参加学生には1単位が認定されるようになった食品栄養科学部・生活健康科学研究科インターンシップは6年目を迎えた。今年度は、夏休みが移動したため日程の合わないところもあり、受入先は11企業1財団法人5研究機関と昨年度より4企業減少した。7人の教員がそれぞれ受入先を訪問し、研修内容、日程をあらかじめ打ち合わせた後、大学院生21名、学部学生4名が7月31日から9月15日までの間に1週間（実質5日）又は2週間（実質10日）の研修を受けた。内容は受入先によって異なり、食品分析、食品開発、品質管理など多様であったが、参加者はそれぞれ新鮮な印象を受けたようである。研修後に寄せられた研修担当者からの報告と学生の報告をもとに単位を認定した。

9月29日（金）には、関係者（参加学生、研修担当者と教員）が集まり反省会（意見交換会）を行った。あいにく学部学生は学外研修と重なったため参加できなかったが、参加者全員に発言していただいた。受入先からは、学生が礼儀正しく好感がもてる、まじめにやってくれた、昨年の研修生

が近況を知らせてくれて嬉しかったなど、有意義であり来年も行いたいという意見が寄せられた。学生からは、とても親切にして頂いた、毎日が新鮮だった、自分の将来の仕事を考える上でイメージが描けるようになったなどの意見が寄せられた。また、教員が事前に受入先と打ち合わせをする際に、もう少し学生の興味や専門について知らせて欲しいとか期間をもう少し長くできないか等の注文も出た。来年度は賛同していただける受入企業を増やすこと、学生に受入側の情報を適切に伝えることに努力したい。



反省会（意見交換会）

高校生が経営情報学部のゼミナールを体験！

「オープンセミナー 2006」

経営情報学部 教授 小出 義夫

「先生達をもっと知ろう！」をキャッチフレーズに、高校生を対象とした経営情報学部主催の「オープンセミナー 2006」（第5回）が、去る10月7日（土）に開催されました。

オープンセミナーは、経営情報学部 に在籍している教員の研究を高校生と直接対話することで、感じ取ってもらいたいという趣旨で行われています。そのため、人数制限を設けていないオープンレクチュア（毎年5月又は6月に実施）とは違い、1セミナー20名の定員制を設けています。セミナーは、大学のゼミナールと同様に高校生と教員、高校生同士のディスカッション形式で行われます。1つ1つのセミナーの時間は45分と短いですが、できるだけ多くの先生達の研究に触れ合えるよう、合計12のセミナーが開かれました。今回の参加者の延べ人数は131名（保護者を含む）でした。



オープンセミナーの様子



交流会の様子

高校生の皆さんは戸惑いを感じつつも、大学の研究に興味津々の様子でした。セミナー終了後、保護者を含む高校生と教員及び在校生との交流会が催され、お菓子や飲み物をとりながら、歓談しました。交流会では、終了後も多くの高校生が残って話をしました。自惚れかもしれませんが、前回のレクチュア、そして今回のセミナーを通じて、高校生に経営情報学部を身近な存在に感じて頂けたと自負しています。来年は一年の企画を根本的に見直し、新しいスタイルでの企画を検討しています。大学と高校との交流を深めるためにも、よりよい企画の立案を模索していきたいと思ひます。

図書館だより

シリーズ 『私の1冊の本』

図書館では、利用者への読書推進の一環として、先生方が読んで、感動し、心に残った本を紹介しています。

野沢 龍嗣 食品栄養科学部 教授

紹介図書名：医者のみた福澤諭吉

著者名：土屋 雅春

出版社名：中央公論社（中公新書1330）

I S B N：4-12-101330-1

図書館所蔵：2階閲覧室（学生文庫コーナー）
中公/1330

福澤諭吉は壹万円札の顔として毎日のように目にしているが、その人となりはあまり知られていない。はばたき95号で、国際関係学部の小谷野教授が既に福翁自伝を紹介されているが、本書では医学・科学面での諭吉の活躍が紹介されている。

諭吉は3回にわたる欧米での見聞で、欧米人との体格・体力の違いを痛感して、この違いが食生活にあると見抜き、従来の日本人の魚、穀物、野菜の食事から牛肉、牛乳、パンを中心とした食生活に改善すべく、食事を栄養学的見地からみる「食養」という考え方を広めた。この食養の精神は我が食品栄養科学部にも連なっている。しかしながら、諭吉が広めた西洋式食生活は、現在の飽食の時代になって、その弊害が生活習慣病という形で現れてきて日本古来の食生活の良さが見直され、また食品栄養科学部では生活習慣病の克服が大きな研究テーマになっていることに時代の遷移とめぐり合わせに感慨を覚える。

もう一つこの本で興味深かったのは、脚気をめぐる論争である。脚気は米食に伴うビタミンB1欠乏症

であるが、当時は原因不明の深刻な病気であった。特に、富国強兵を担う陸軍、海軍の兵士に多数発症した。その原因をめぐり陸軍と海軍が激しく対立し、陸軍には、ドイツ医学を修めた後の文豪森鷗外ら官学（東大）派が、海軍にはイギリス医学派の高木兼寛らがあり、諭吉は後者を応援していた。海軍は高木の発表した脚気の原因説に基づき、麦飯を採用して、日清・日露戦争では脚気患者がほとんど出なかったのに対し、陸軍は脚気菌という細菌原因説で、米食に固執したため、戦死者の1/4以上が脚気による死者であったという。私が日本細菌学会に初めて加入した当時、発表の場でいつも諭吉の創設した慶応大学と東京大学の研究者の間で他の学会では見られない激しい感情的な論争が繰り広げられ、びっくりしたものだ、本書を読んで、これも明治の時代の論争に基を築いていたのかと納得がいった。

細菌学者の北里柴三郎は破傷風菌の産生する毒素を動物に接種して、血清中に毒素の作用を中和する物質を見つけ、これを抗毒素と命名し、治療応用へと発展させた。抗毒素は免疫学的には抗体であり、北里は抗体の発見者としてパスツールと並んで免疫学の父と称えられている。この北里も帰国後の日本では冷遇されていたのを、諭吉は物心両面から支援したことも紹介されている。

著者の土屋教授（慶応大医学部内科）とは、かつて日米医学会コレラ部会で同席した縁もあって、この本は一気に読み下した。前述の福翁自伝とあわせ読むと、明治の先達福澤諭吉の偉大さが浮かび上がってくる。



本学教員からの著書寄贈

先生方から著書を寄贈していただきました。（平成18年8月以降）
図書館自由閲覧室の教員著作コーナーに配架して利用に供しています。

松森 奈津子 講師（国際関係学部）

- ・「国際関係思想史」 新評論 2003年
- ・「Civilizacion y barbarie」 Biblioteca Nueva 2005年
- ・「Los asuntos de Indias y el pensamiento politico moderno」
Servicio de Publicaciones de Universidad Complutense de Madrid 2006年

はばたき寄金からのお知らせ

第9回学生スピーチコンテストを開催

学生スピーチコンテストが、剣祭初日の10月28日(土)に開催されました。今回は「私の目指す社会人像」
「インターネット時代に思うこと」をテーマに、日本語の部5人、英語の部3人の参加がありました。

はばたき寄金運営委員会委員の先生方などにより審査が行われ、入賞者が次のとおり決定しました。



〔日本語の部〕

賞区分	氏名	所属
優秀賞	吉岡 見悟	経営情報学部 4年
優秀賞	ダオ チュイ ユウン	経営情報学部 2年
入 選	中村 良平	経営情報学部 4年
入 選	多田 賢吾	国際関係学部 4年
入 選	ディン ティ カム ニュン	経営情報学部 1年



〔英語の部〕

賞区分	氏名	所属
最優秀賞	鈴木香寿美	国際関係学部 2年
優 秀 賞	白井 智	国際関係学部 3年
優 秀 賞	レーミー ユウン	国際関係学部 3年

第10回学生文芸コンクール入賞作品決定

今年度の文芸コンクールは、文芸部門では、小説、紀行文、詩・その他、短歌、俳句を、また、評論部門ではテーマ「ことばの力と役割」で募集したところ、文芸部門で23人から41作品(小説9・紀行文2・詩22・短歌3・俳句2・その他3)、評論部門で2作品の応募がありました。

本学の先生方による審査が行われ、次のとおり入賞作品が決定しました。

表彰式は、同じく剣祭初日の10月28日(土)に行われ、西垣学長から賞状と副賞が贈られました。



〔入賞一覧〕

部門	賞区分	作品題名	氏名	所属
文 芸 部 門	最優秀賞	小説 嘘つき親父の第3土曜日	水野 大輔	経営情報学部 2年
		紀行文 小さな出会い	斎木友梨花	国際関係学部 2年
	優秀賞	詩 僕の居場所	小橋 翔太	食品栄養科学部 4年
		その他 幸せにはなりたくない	杉山あづさ	国際関係学部 3年
		小説 ハイブリッド・レインボウ	森山 裕介	薬学部 4年
	佳 作	小説 最後の恋人	望月小羊子	国際関係学部 4年
		詩 幸福の只中	望月 和	国際関係学部 3年
		詩 空濛思故人	王 新菟	経営情報学部 2年
		詩 片隅でひとり	大石 涼子	国際関係学部 3年
		小説 幸福を描けるのなら	石田 理沙	薬学部 2年
	努力賞	小説 僕らが見てきたもの	多田 賢吾	国際関係学部 4年
		短歌 私の研究室	新免 拓弥	生活健康科学研究科 2年

部門	賞区分	課 題	氏名	所属
評 論 部 門	優秀賞	ことばの力と役割	武田 直明	国際関係学部 3年
	佳 作		鈴木香寿美	国際関係学部 2年

第9回学生スピーチコンテスト～最優秀賞～

<英語の部>

「私の目指す社会人像」

国際関係学部 国際言語文化学科 2年 鈴木香寿美

「Becoming a cosmopolitan」

Hello, everyone. My name is Kasumi Suzuki and I'm in the Faculty of International Relations. The title of my speech today is “ becoming a cosmopolitan ” . Today I'd like to talk about my experience in trying to become a cosmopolitan.

So how does one become a real cosmopolitan? Surely it is difficult to explain it. However, Professor Teratani, who is the author of “ An encouragement of understanding different cultures ” , said that there are three main points in becoming a cosmopolitan which I'd like to talk about now. The first point is to have the adaptability to different cultures. The second point is to have the ability to express own opinion. The last point is to have good language ability. I've tried to do several things to acquire these abilities, so I'd like to talk about them in detail.

First, it is important to have the adaptability to different cultures. When we visit other countries, we are often surprised at the difference between our own culture and culture of the country we visit. Each country has its own culture. I personally was surprised by the cultural difference when I



visited Britain. I sometimes went downtown with my friends and often heard this phrase, “ After you ” . Almost all men I met in Britain, even the very young ones, said this phrase when I got into a shop or took a lift. At first, I was very surprised and confused because I've never had an experience like this. But after I came to know that it is one of the British cultures, I got used to it. And then, I was able to adapt to British culture and also understand British way of thinking. I think we can have better understanding of other ways of thinking in the country we visit after we adapt to the culture of that country. In order to understand other ways of thinking and become a real cosmopolitan, it is very important to have the adaptability to different cultures.

Second, it is important to have the ability to express own opinion. Mr. Ito, who is the author of “ Organisation and Human Being ” , said that many people who belong



to organisations tend to go along with others' opinions, and not to express their own. It is because many people are afraid of doing different things from others in organisations. However, as Professor Teratani stated in his book, going along with others' opinions every time is not good in the international society. In Japan, many people tend to go along with others' opinion in groups because they think “Harmony is the greatest of virtues”. But in the international society, if we always go along with others' opinions and not express our own, others will think that there is no substance to us. When I was in Britain and took part in the summer English course, I was often asked “What is your opinion? Not someone else's opinions!” Then I realised that the most important thing is to express own opinion in my own words. We need to have the ability to have and express own opinion, and not going along with others' in order to become a cosmopolitan.

Finally, it is important to have good language ability. For example, these days we have many opportunities to speak English to state our opinions in the international society. It is correct to assume that we can't live in the international society without English, as Professor Teratani said

in his book. In order to understand different cultures or express our own opinion, we first need to have good language ability. I've thought that if I could speak other languages fluently, I can communicate with many people and understand different cultures, and of course I can express my own opinion in those languages freely. So I am learning three languages now at this university. I think we can receive information or others' opinions from other countries and send our own opinions to them if we have good language ability. For me, learning other languages at this university now is the process of becoming a cosmopolitan. In this way, having good language ability is important for us to become a real cosmopolitan.

In conclusion, three points of becoming a real cosmopolitan are to have the adaptability to different cultures, to have the ability to express own opinion and to have good language ability. Today I talked about my experience in trying to become a cosmopolitan until now, but I will keep working hard and make efforts at this university. I'll continue to keep climbing up these steps to become a real cosmopolitan. Thank you for listening.

第20回 剣祭 ~ 20年目の太陽は 燦燦と輝いて~



(概要)

10月28日(土)~29日(日)の両日、第20回剣祭が開催されました。創立20周年にあたるの今年のオープニングセレモニーでは、県大吹奏楽部・シンフォニック・ウインズの演奏の下、西垣学長の挨拶に続き、同窓会、後援会関係者の方々をお招きしての創立20周年記念植樹が行われ、スタートしました。

学部棟では、「剣祭バスツアー06」やアコースティッククラブ等によるライブ演奏、茶道部によるお点前の披露、華道部によるデモンストレーションなどが行われ、写真部などの文科系クラブの展示、発表、恒例の健康増進研究会による骨密度測定、薬学部及び食品栄養科学部の研究室公開も行われました。

ユニバーシティプラザやコミュニティプラザ等には、40を超える模擬店が出店し、昨年に引き続き、模擬店No.1決定戦も行われました。また、体育館では、恒例のフリーマーケットやバザーも行われました。

モニュメント下では、軽音楽部のライブや華やかなチアダンスが、大講堂ではジャズダンス部の舞台公演「Swing」や箏曲部による優雅な琴の調べが披露され、小講堂では、THE VIVALEDGEのアカペラライブ等が行われ、多くの観衆で賑わいました。

創立20周年という節目の年の剣祭、燦燦と輝く太陽のように、来場された方々に多くの光を与えることができたのではないのでしょうか。



太陽は、ころがりつづける

第20回剣祭後記

第20回剣祭実行委員会委員長 瀧澤 うた子

極地の、あの「ころがる太陽」のような存在になることを望んで、ひたすらに想像し、創り続けた私たちの太陽「第20回剣祭」は10月28日、29日を無事に終えることができました。そして、白夜の間、極地で沈むことなく地上をやさしく照らし、影を与え続ける「ころがる太陽」のように、人の心で静かに転がりはじめました。

第20回剣祭が終わり今思うことは、やはり「剣祭」という太陽がたくさん場所でいろいろな光り方をしていたということの喜びです。模擬店や展示、発表などさまざまな形で剣祭に参加してくれたサークル、団体のみなさん、御来場くださったたくさんの方々、学校関係者の方々、当日来ることはできなかったけれど剣祭の成功を祈ってくれた人、そして実行委員のみんな、それぞれの人たちが笑う場所で、それぞれの人の手で、太陽はそれぞれの色で輝いていたと思います。そしてこれからも、太陽は人の心の中を転がり続け、輝き続けていくでしょう。これもすべて上述した皆様やそのほかにも多くの方々との力と協力があったからに外なりません。本当にありがとうございます。

一方で、実際に剣祭を終えてみてのさまざまな課題も浮き上がっています。20年の節目を越えた剣祭をまたどんな形で仕切り直していくのか、それ自体の見直しや、環境問題への配慮、大学構内の土地の有効利用、参加してくれるサークル、団体のみなさんとの更なる協力体制も求められるようになるでしょう。そうしたことは、私たち実行委員会が積極的に取り組むべき義務であると思われまます。そして加えて、剣祭を私たちより長く見てきてくれている近隣の皆様や実行委員とは異なる視点をもつ方々の協力や提言は欠かせないものであり、皆様にはこれからもより一層協力をお願いしたいと思います。

第20回剣祭は、皆様のおかげで、無事に静岡県立大学大学祭の歴史の中に加えられました。それは、本当に止めどなく流れていく歴史の中のたった一部に過ぎません。しかし、それはいつまでも残り、受け継がれ続ける尊い記憶です。誰かの心の中で転がり続け、未来を明るく照らす太陽がこれから先も今と変わらずに生まれ続けていくことを望みつつ、実行委員会からもう一度感謝の言葉を言わせていただきます。

剣祭にかかわってくださった皆様、本当にありがとうございました。



静岡県立大学 連合学友会「はばたきの会」を設立

静岡県立大学連合学友会「はばたきの会」幹事 学長補佐・薬学部教授 園部 尚

国立大学の法人化に伴い、国立大学のみならず主要他大学においては、卒業生と大学とのネットワークを強化する動きが活発化しています。静岡県立大学においても、平成19年度の独立法人化を控え、静岡県立大学連合学友会「はばたきの会」を、県立大学の大学祭「剣祭（10月28日（土）、29日（日）開催）」の開会式に合わせ設立しました。

この「はばたきの会」は、既存の学部同窓会等の学内団体を緩く束ね、在学生、卒業生及び教職員相互の交流・親睦を図るとともに、大学と連携してその発展に寄与することを目的としています。第一回事業として、静岡県立大学創立20周年記念事業



創立20周年記念植樹



生薬・万葉講演会

実行委員会の協力を得て、上記剣祭初日に「ホームカミング in 剣祭」と銘打ち、創立20周年記念植樹、生薬・万葉講演会と薬草園ツアー、イキイキ・キャンパス・ツアー（健康支援センター企画）を開催しました。

実行委員会の協力を得て、上記剣祭初日に「ホームカミング in 剣祭」と銘打ち、創立20周年記念植樹、生薬・万葉講演会と薬草園ツアー、イキイキ・キャンパス・ツアー（健康支援センター企画）を開催しました。

【設立の趣旨】

平成19年度から、静岡県立大学は「公立大学法人」となり、自主的な運営が求められています。

静岡県立大学はこの新たな節目を迎えて、県政の理念である「創知協働」の場として、独自性の高い教育・研究を目指します。教育面では世界的に通用する人材を育成し、学術研究の面では21世紀の先導的な課題に挑戦していきます。静岡県立大学が静岡県、日本そして世界に「はばたく大学」となるためには、学生、卒業生、教職員、関係諸団体の諸資源を結集し、21世紀にふさわしい魅力ある大学を建設しなければなりません。静岡県立大学連合学友会「はばたきの会」は、学友からの寄付を基本財産とし、この目的を実現するために設立いたしました。

「はばたきの会」は、静岡県立大学を21世紀において、「地域、日本と世界にはばたく大学」となるよう支援してまいります。

静岡県立大学連合学友会「はばたきの会」は、皆様からの御寄付により支えられており、その適切な運用により静岡県立大学の活動を支援していくものです。皆様の御支援をここに結集することによって、個々には不可能な事業が可能となります。大学本来の教育・研究活動を効率的に支援し、優秀な若者を育成し、地域、日本のみならず国際レベルでの学術的貢献を目指します。

魅力ある研究・教育環境とはなにか？

静岡県立大学連合学友会「はばたきの会」は、地域、日本、海外から優秀な若者を集め育成するうえで、魅力ある研究・教育環境とはなにか、このことを考え、その実現に真剣に取り組んでおります。

静岡県立大学連合学友会「はばたきの会」への「寄付」をお願いします。

この「寄付」は、いままでのいわゆる「募金」とは全く趣旨が違います。特定の建物を建造したり、特定の催し物を行うための募金ではありません。大学の教育・研究に真に必要な場を創造するために、いわば学術への投資をお願いするものです。その実りは本学の社会的存在価値を高めるもので、将来全学友が享受できるものです。

学友の皆様には、なにとぞ上記の趣旨を御理解の上、御支援賜りますよう心よりお願い申し上げます。

寄付金振込先：郵便振替口座番号 00870 - 0 - 60959 加入者名：静岡県立大学連合学友会「はばたきの会」

クラブ・サークル紹介

Little World Camp実行委員会

国際関係学部 国際関係学科2年 望月 秀美

Little World Campとは...

私たちはリトルワールドキャンプ実行委員会です。平成16年度に国際関係学部津富宏ゼミのゼミ生の企画として始められ、平成17年度からは有志の学生がサークル化して引き継ぎ、今年で3回目となりました。このキャンプは、日本人と在日外国人の子供たちの交流を図る多文化共生キャンプです。同じ町に住んでいながらなかなか交流の機会を持つことがない子供たちと、“国籍を問わず、それぞれの国の文化を通して国際交流をしよう”というのがこのキャンプの目的です。



みんなの手形で、大漁旗を作りました。

今年の活動

今年のキャンプは8月9～11日に富士市立少年自然の家にて行われました。ブラジル・ペルー・韓国・日本の小学生、大学生ボランティア、サポートスタッフ、そして私たち実行委員会の計57人が参加しました。前日からの台風でキャンプ開催が危ぶまれたものの、キャンプ3日間は天候に恵まれ、野外での活動もすべて行うことができました。1日目は多国籍料理作り、2日目はウォークラリー・ゲーム大会・キャンプファイヤー、3日目は記念品作りをしました。はじめは言葉の壁にぶつかって打ち解けられなかった子供たちでしたが、言葉が通じなくても一緒に遊べるのがわかると、お互いが歩み寄って仲良くなっていきました。その姿を見て、私達もとても嬉しく思いました。



国旗ビンゴの様子

また、今年は実際にキャンプに参加してくれた子供たちを招待し、キャンプで知り合った仲間との再会の場を設けました。みんなで思い出のスライドショーを見た後、学祭の雰囲気味わってもらいました。

Little World Camp 4に向けて

現在は、新しいメンバーを迎えて次のキャンプに向けて動き始めています。子供たちの「またキャンプに参加したい」という言葉を励みに、笑顔いっぱいの楽しいキャンプを作っていきたいです。

連絡先

御意見・御感想がございましたら、下記のアドレスまでご連絡ください。

リトルワールドキャンプ実行委員会
E-mail : littleworldcamp3@yahoo.co.jp



大漁旗とっしょに記念撮影

はばたき100号までのあゆみ ～14年間を振り返って～

はじめに

学内情報誌「はばたき」は、平成4年11月5日、「静岡県立大学 学内ニュース」として第1号が発刊されました。第1号の中で「発刊にあたって」と題して、次のようなコメントが述べられています。

『(前略)学内情報の滞りの解消を目指し学部の枠を越えて広くキャンパスの動きを皆様
に知っていただく一助とするため、「学内ニュース」を発刊することとしました。(中略)
息の長い、皆様に親しんで読んでいただけるものに育てていきたいと考えております。』
(原文のまま引用)

この第1号の発刊以来、14年の歳月が流れ、今回、第100号を発行することに至ったことは、多くの教職員、学生をはじめとする読者の方々の御協力のおかげであり、「はばたき」は、発刊当初の趣旨に適った息の長い情報誌となりました。

それでは、これから、第100号に至る歴史を振り返ってみたいと思います。



第1号・平成4年11月5日発行
「発刊にあたって」

「学内ニュース」から愛称「はばたき」へ ～表紙にも歴史が...～

発刊当初の「静岡県立大学 学内ニュース」という名称は、平成9年12月5日発行の第56号まで続き、全学教職員からの愛称公募を行った結果、平成10年1月5日発行の第57号から現在の「はばたき」という愛称を使用することとなりました。

また、平成4年12月4日発行の第2号から平成10年7月1日発行の第63号までの間は、歴代の学長(初代・内園学長、2代・星学長)の書を表紙題字として使用させていただきました。

表紙の装丁が一新され、現在のように写真を使用するようになったのは、平成10年

10月発行の第64号からで、平成13年3月発行の第76号では、県立大学、県立大学短期大学部及び同月末で閉学科となった県立大学短期大学部浜松校の校舎が表紙を飾っています。



特別編集号
平成9年5月23日発行
「石川知事・創立10周年によせて」



第57号・平成10年1月5日発行
「はばたき」という愛称を使用



第76号・平成13年3月発行
3キャンパスが表紙を飾る

地域に根ざした連載記事やユニークな似顔絵シリーズも...

さらに、連載記事という観点から見ますと、県立大学及び谷田地区の歴史や風俗等を記した「谷田風土記」は、平成5年2月3日発行の第3号から現在に至るまで、実に92回にわたり、国際関係学部の高木桂蔵教授に御執筆いただいています。

そのほか、平成6年5月10日発行の第17号から平成9年1月7日発行の第46号までの間、似顔絵やカットを経営情報学部の小島茂教授(当時、助教授)が担当してくださいました。中でも、平成6年7月7日発行の第19号から平成8年12月5日発行の第45号までの間、「キャンパスの外国人」シリーズとして18回にわたり、文章と似顔絵を掲載していただきました。

ちなみに、記事の中に写真が掲載されるようになったのは、平成7年9月5日発行の第31号の「大学概要説明会開催される」という記事からです。また、余談になりますが、この「大学



経営情報学部の小島茂教授による
似顔絵



「キャンパスの外国人」シリーズ
文・似顔絵は、経営情報学部
の小島茂教授による

概要説明会」という言葉、今は「オープンキャンパス」という言葉に置き換えて使用されているのが一般的ですが、意外にも平成12年9月発行の第73号までは、「大学概要説明会」という言葉が使われており、「オープンキャンパス」という言葉が登場するのは、翌平成13年9月発行の第78号からになります。

14年の長い歳月の間には、いろいろな出来事が...

14年にわたる100冊の「はばたき」の中には、その時々を象徴する様々な記事がありました。

「女子サッカー部、2年連続全国大会に出場」(平成6年11月7日発行・第22号)、「(写真)短大部静岡校工事現場(旧薬大跡地)の防護柵に美術部学生が行ったペイント絵」(平成8年2月5日発行・第36号)などクラブ・サークル活動の記事、「櫻井よしこさん、本学で講義を行う」(平成8年7月2日発行・第41号)「エスパルス 長谷川、真田 大いに語る 学生とのトークショー行われる」(平成10年2月6日発行・第58号)「全学共通科目で知事、副知事講義」(平成11年6月発行・第67号)など特別講義や学生主催のトークショーの記事、「学内で結婚式」(平成12年3月発行・第71号)といった本学始まって以来、初めてとなる出来事を報じた記事等々、枚挙にいとまのないところです。

なお、「はばたき」のバックナンバーのうち、第70号(平成12年1月発行)以降のものは、本学のHP(<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp>)の「情報誌はばたき」のコーナーでご覧になることができますので、創立20周年の節目の年に懐かしい記事に触れてみてはいかがでしょうか。



第36号・平成8年2月5日発行
「美術部学生によるペイント絵」



第58号・平成10年2月6日発行
「清水エスパルス選手とのトークショー」



第71号・平成12年3月発行
「学内で結婚式」

「はばたき」を学内ニュースの宝庫にしよう

- 第100号記念刊行にあたって -



広報委員長 出川 雅邦

平成4年11月、本学の広報誌として「学内ニュース」第1号が発刊されました。その後「はばたき」と名称は変更されましたが、その目的を継続し、ここに第100号の刊行を迎えました。大学を構成する学生、教員、事務・技術職員から多くのメッセージが寄せられてきた賜物と感謝する次第です。これまで、大学からのメッセージはもとより、学生からのクラブ、サークルやボランティアの活動報告や、先生方からの寄稿文を数多く掲載してきました。

本年は、本学創立20周年にあたり、10月から多くの記念事業が行われ、「はばたき」第100号では、この記念事業報告も幾つか掲載致しました。記念号に花を添えるものになったのではないのでしょうか。

これまで、号を重ねる毎に内容の充実に努めてきたところですが、来年度から本学も独立法人化されることが決まり、学内情報提供役としての「はばたき」を「ホームページ」との棲み分けを踏まえて、より発展的に改変する時期に来ているようにも思えます。広報委員一同「はばたき」をより良い広報誌にすべく張り切っておりますので、学生、教員、事務・技術職員の皆様には、より一層の御支援、御協力をお願い致します。

谷田地区の茶もみ唄

日本平（有度山）山麓は、お茶の産地として有名である。明治期になり、主要輸出商品となり、その生産は急増した。当然それにつれ作業唄もうたわれた。

茶摘み・茶もみ・仕上げなどでいろいろと唄があり、まとめて『茶唄』（茶ぶしともいう）と呼ばれている。

最初に全国に知られたのは、大正十五年（1926年）一月十六日で、東京のNHK愛宕山放送局JOAKのスタジオから25分間放送されたのがそれ。日本最初の茶唄のラジオ放送であった（『ラジオ放送』は前年始まったばかり）。今年（2006年）は、それから80年目になる。

このときの歌詞が分かっている。

『茶つみ唄』 小鹿・堀井せき
『お茶のでんぐりもみは小脇がいたい、
もませたくない我がつまに』
『新茶古茶でも摘みこみや溜まる、
摘まにや溜まらぬ芭蕉茶も』

『茶もみ唄』 池田・加瀬沢品吉
『お茶の出どこは安西茶町、つけて流すが宮が崎』
『宮が崎から車に積んで、牛にひかせて清水まで』

『当時のままの唄残る』

一行は、同月十二日、静岡茶業組合連合会が主催した『茶唄競演会』で各地区の予選を勝ち抜いた42名のなかから選ばれた人達。茶業会議所技師・小泉武雄に引き連れられ上京したもの。ほかに『日本蓄

谷田風土記

92

音器商会』（赤坂豊南坂）でレコード吹き込みをしている。このレコードはその後各方面に行き渡り、全国の茶唄のモデルとなった。

これから全国の茶唄が、まとまるようになったのである。いわば『有度山麓は茶唄のふるさと』と言えるのである。

ここに紹介するのは、当時のものにもっとも近い『谷田の茶もみ唄』である。

『谷田の茶もみ唄』
『ハアー お茶は始まる お茶つみや来るナエー
（ハーレそうだそうだ）
ハアー今年もナー来たかよ（ハーコリヤコリヤ）
ハアー今年も来たかよナーエーあの娘
（ハアーよびこめよびこめ）』

谷田の茶もみ唄

ハア おぢや は はじまる ハア おぢやつみやー ーくー
るーナーエー (エ レソウター ソウターヨ) ハア ことしもー
ー ナー ー きたかよ (ハコリヤコリヤ) ハア きたかよー
ー ナエー ー あ の む す め ハア よびこめよびこめ

なお、希望者には、このテープをさしあげます。研究室へ直接申し込ください。

<申込先> 国際関係学部棟3407号室 TEL・FAX 054-264-5347

(国際関係学部 教授 高木 桂蔵)

本学大学院・静岡大学大学院連携講義が本学主催で開催！

「健康長寿を支える生命科学の最前線」

薬学研究科長 奥 直人

本学大学院薬学研究科・生活健康科学研究科と静岡大学大学院理学研究科・農学研究科との連携を有効に活用するため、昨年度より静岡市産学交流センター（B-NEST）で連携講義を開始しました。本年度からは本学主催の連携講義を開始し、本年度は9月22日に「健康長寿を支える生命科学の最前線」と題して連携講義が開催されました。看護学部・金澤寛明先生、薬学部・伊藤邦彦先生、食品栄養科学部・横越英彦先生、静岡大学農学部・杉山公男先生に加え、国立健康長寿医療センター研究所の原英夫先生、静岡県がんセンター研究所の秋山靖人先生がそれぞれの御専門から有意義な講義を行ってくださいました。本学大学院94名、静岡大学大学院41名の計135名の受講生が全日熱心に講義を受講していました。



学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎！

教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動などの寄稿をお待ちしています。大歓迎します。

事務局経営課・企画スタッフ（管理棟2階）あてをお願いします。E-mail:kikaku3@u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集：静岡県立大学広報委員会（事務局 TEL 054-264-5103）

静岡県立大学ホームページアドレス：<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp>